

刻廻る裁定の太陽

星の空

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある神はとある出来事の為に再び大地に足を付けた。

それは、その神にとつて楽しくかけがえないものとして心に刻む。

時にシリアス有り、笑い有り、そんな貧しい日々を送る物語だ。

目次

ある日の旅出	1
1 日目	4
他の神話の民達との会合	
2 日目	18
前哨戦、後続の子は高潔	
3 日目	
神格解放。幼子（ホムンクス）の未来の為に	26

ある日の旅出

「それでも本当に行くのかい、ギル？」

「貴様がなんと言おうとも我はオレこの道を進む。我が友エルキドゥ亡き今、我は怖いのだ……」

「死ぬ事が、か。………君がそこまで覚悟を魅せると言うなら僕はもう留めない。だが、これだけは言っておくよ。君は何れ知る事となる。君が、神と人の袂を頌った時、何を失い何を得たのか。」

俺は、俺にとつては友であり、俺が導こうとしたこの傲慢で賢い王に問うた。それは長く険しく、やがて至るだろう極地を目の当たりにしてしまふ。そんな旅になると言つた。

しかし、この王は傲慢だ。故に、留まる事はない。

だから、この傲慢な王の成した偉業が何を意味したのか、そのヒントを与えておいた。しかし、この王は聡明だ。だから、この問いの答えに既に至っているだろう。しかし、この王は答えない。この王は俺に知らしめようとしている。人間に限界はない。だから……死の克服もできると。

だからこそ、

「済まないね、俺の妹があんなので。お陰で君を手放すこととなった。これはその詫びだよ。それに、この剣は君を担い手として選んだ。君が持つことに意味がある。それでも不安なら、君の蔵の奥底に仕舞えばいいさ。この剣自身も感じてる。己は1つ間違えば災禍に見舞われると……」

「そうか。否、そうだな。ならば、旅の第一のお供として共に行こうではないか、なあ、乖離剣エアよ。」

「それじゃあさよならだ。俺は常に君を見守ってるよ。メソポタミアを築きしウルクの王ギルガメッシュよ。」

「ああ、貴様も伸び伸びと眺めて居ればいい。太陽神シャマシユ。」

この傲慢な王は乖離剣エアを蔵の底に仕舞うと二本一対の黄金の剣を此方に渡してきた。

「貴様がエアを渡すと言うなら我は此奴を貴様に渡す。此奴なら貴様の強大すぎる権能を戒めてくれるだろうよ。肌身離さず持っているがいい。ではな。」

この愚王め、俺の魂胆に気づいたな？

神造兵装を2つとも押し付けようと乖離剣エアを渡したのだが、ちやつかり終末剣エソキを渡して走り去りやがった。

「はあ、でも俺は知ってるんだよ。君が不死を諦めることは。君は王であつて探索家で

はない。紛れもない半端者なんだから。」

俺は焔造こうぞうで鞆を造り、その鞆に終末剣エンキを仕舞い、背に帯びた。

「うん、様になつたかな。俺も俺で成すことを成すか。」

そう言い残して俺は此処を立ち去った。

この物語は、俺にとっては物珍しく、楽しい日々を送るものだ。

1日目 彼の神話の民達との会合

あれから幾千もの月日が経った。

それは本当に永い刻だ。

そんな刻が経った中、俺は英霊の座にいた。だが、俺は星霊だからか、座が広い。

まあ、俺自身の固有結界を座に当てはめてるだけなんだけどね。座ではなんもないゴロゴロと寝転がったりする生活しか出来てない。本当に暇だ。

だが、それは今日まで。座の最奥……根源の手前にある霊長類アラヤからある話がが持ちかけられた。

『汝、永刻の流に逃れたいか？ならばそこにある邪龍殺しの英雄の心臓を手を取れ。それは近き時に必須となる。』

今まで何も無かったこの座にて、かなりの欲求不満を抱えていた俺からしてみたら、飢えた獣が獲物を得た時の快感が訪れた。

俺は、終末剣エンキを一つ霊体化（座に至るとできる）させ、焰造えんぞうで身バレしない鎧を纏い、その手に龍殺しの心臓を持った。

その途端、目前が暗転。移動する事に気づいたので、固有結界を仕舞っておく。

そして、移動が始まった。その間に飛ばされる時代、その時代の一般知識、常識、俺のいたウルクとは別の神話、その他諸々の情報がスッと入ってきた。

まあ、井の中の蛙だと俺は気付いたさ。

その中で気になる情報が入ってきた。

聖杯戦争

あらゆる願いを叶える願望器、聖杯を賭けて、7人の魔術師とその7人が各個で選び
召喚したサーヴァント……クラスという格に嵌める抑止力により弱体化した英霊が武
知勇……覇を競い、最後に残ったコンビが叶えることができる儀式。

これには大きな興味を持った。もしかしたら、俺の後続の太陽神に会えるかも知れな
い。俺はそんな淡い気持ちを得た。

さらに、こんな情報を得た。

聖杯大戦

本来の聖杯戦争とかけ離れ、サーヴァントが赤の陣営7騎VS黒の陣営7騎からなる
全14騎による大型の聖杯戦争。

俺はこの聖杯大戦に招かれたのだ。

マスターはゴルド・ムジーク・ユグドミレニア。

俺たち黒のサーヴァントを維持する魔力供給源であるホムンクルスを創り出した男。用意したのは血の着いた菩提樹の葉。成程、龍殺しジークフリートを召喚しようとしたのか。

そして、霊長類は俺を座から出す為に用意したのが、ジークフリートの心臓。

俺が彼の心臓を持つことから、ジークフリートではなく俺が召喚されたのであろう。

しかし、この心臓……ジークフリートが英霊に至る前、死する時に持っていた原典ではないか？まあ、俺の力なら再起動させることは可能だ。

「そろそろ着くかな。さて、神代は既に絶えた時代。だが、此度は俺のいた神話……メソポタミアとは異なる神話に住まう万夫不当の戦士達と覇を競う。俺は新たな楽しみを得る事に感銘しているのだろうな。さあ、星霊に匹敵する英霊は何処にいるのか、楽しみだ。」

???

「素に銀と鉄。礎に石と契約のユグドミレニア。」

手向ける色は黒。「」

「降り立つ風には壁を。」

「四方の門は閉じ、」

「王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。」

「閉じよ。」

「閉じよ。」

「閉じよ。」

「閉じよ。」

「閉じよ。」

「繰り返すつどに五度。」

「ただ、満たされる刻を破却する」

「——告げる。」

「汝の身は我が下に、」

「我が命運は汝の剣に。」

「聖杯の寄るべに従い、」

「この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

金髪のちよび髭なデブ、眼鏡を掛けた身長の高い女性、車椅子に座るおしとやかな少女、眼鏡を掛けたモブそうな少年が

青白い肌の瘦せた男が上座で見守る中、唱えた。

その唱え、が終えると共に各個の前にある魔法陣が輝きを増し、そこから、それぞれ4人の姿が現れた。

その4人は同時に答える。……………正確には3人だが。

「召喚の招きに従い、参上した。我ら黒のサーヴァント、我らはユグドミレニアと共にあり、我らの剣は貴方方の剣である。」

その姿を見て、その場に居合わせた者達は様々な反応をする。

上座に座る男の隣に立つステッキを持った青年が嗤い、

ちよび髭なデブは「おおっ」と、握り拳を作り、

近くで見ていた少年はテラス？から柵を乗り越出した。

ステッキを持つ青年は、高らかに隣に座る男にこう告げた。

「王よ、彼等こそ我ら黒のマスターが召喚したサーヴァント。即ち、王の配下です。」

それを聞いた、王と呼ばれた男は頷き、立ち上がる。

そして、高らかに宣言した。

「聖杯を求め、召喚に応じた者達よ。まずは黒の陣営として役目を果たせ！」

その宣言をステッキを持つ青年が頷き、下座にて頭を垂れるサーヴァントに告げた。

「彼らの召喚を以て、我らユグドミレニアは二度と戻れぬ戦いに足を踏み入れたのだ。

だが！この対戦が集結した時、マスターとして戦い抜いた者には無限の栄光が約束され

ている！恐れることは無い！我々は既に万能の願望器、大聖杯を手に行っているのだから

！

???

ステッキを持つ青年の宣言と同時に儀式は終わり、通称謁見の間であろう場所の明かりが灯る。

そこに、ある声が響く。

「全員ちゅうもおく！」

その声を発したのは、桃色に白のメツシユのある長髪を三つ編みにした表地が白、裏地が赤のマントを羽織る腰に剣を帯びた少女。

その声に反応して全員が注目した。

「ああ？」

その声に俺のマスターが声を出した。しかし、気にせずこの少女騎士は喋る。

「召喚された皆で自己紹介しようよ！ほら、今は皆見方じゃない？だったらさ、だったらさ！いつその事真名を名乗りあつた方が効率がいいんじゃないかな！と、言う訳で僕の名前はアストルフオ。シャルルマーニュ十二勇士が一人。クラスはライダー。よろしくね！」

言い出しつぺ故か、クラスと共に名乗りあげた。ふむ、シャルルマーニュ十二勇士の

アストルフオと言えば、理性蒸発者だったはず……だからここまで堂々と出来るのか。そう内心思っているならば、ライダーは俺の隣にいる皮鎧に身を包む馬の尾を持った茶髪の青年に駆け寄ってきた。

「君は？」

理性蒸発者がここまで活発とは、ムードメーカーにはもってこいな性格だな。

茶髪の青年はマスターであろう車椅子に座るおしとやかな少女に顔を向け、少女は頷いた。確認をとり、承諾されたようだ。

「サーヴァント・アーチャー、ケイローンです。」

「おお！よろしくケイローン！」

アーチャー、ケイローンは手を差し出し、ライダーは両手で握り、握手をする。

ケイローンか。俺の後続にいたアポロンが確かギリシャ神話で、その始祖、クロノスの一子だったか？

俺と似たメイカーにして聡明な奴なのは分かる。この陣営の要になるだろうな。

し終わったなら、一回転して、俺の目の前で黙り込んだ花嫁姿の少女に向き直る。

「次、君は？」

「ヴウツ」

ライダーが聞くと、花嫁姿の少女はそっぽを向いた。恐らく、そりが合わないのだろ

う。

ライダーは首を傾げ、この花嫁姿の少女のマスターであろう眼鏡を掛けたモブのような少年に声を掛けた。

「ねえ、この子の真名教えて!」

ズツカリと言いつけるライダー。そのライダーの声に少年はたじろぐ。だが、ライダーは少年に駆け寄り、目をキラキラとさせる。

その態度に少年は反応に困る。

「ふ、フランケンシュタイン」

「よおし、フランちゃんだね!」

「ウヴウツ!!」

ライダーの言い方に物申したいのか、睨む（おそらく）バーサーカー。

フランケンシュタイン、造られし存在か。未完成だからか、俺の予測では最弱のサーヴァントだろう。逸話も神代ではないっぽいし。

「ああ、ごめんごめん!なんか怒らせちゃったみたい……!」

理性蒸発者でも、バーサーカーが怒つたのは分かるようだ。

最後に此方に向けて聞いてきた。こういう場合、第一印象が大事だろう。

そう思いつつ声を出す。

「俺は——」

「待てっ!!」

全ては名乗らないが、ヒントは与えよう。そう思った束の間、俺のマスターが阻害した。

マスターは俺の前に出てきて俺にこう告げる。

「セイバー、お前は口を開くな!」

そう告げて、俺の前に立ち、睨みをきかせる。それに物申したのは、眼鏡を掛けた身長の高い女性だ。

「真名の開示は予め申し合わせていたことでしょう?」

「事情が変わった。破棄させてくれ。真名が漏れる口は出来るだけ少ない方がいい。」

この事情は粗方察する。俺がジークフリートではない上に、焔造したこの鎧によりマスターでもスペックと真名が分からないからだろう。

それが構わないのか、ステッキを持つ青年に聞くアーチャーのマスター。それに、青年は答えた。

「いいだろうゴールド。お前が責任を持つと言うなら許可しよう。」

「無論だとも。」

ゴールドが青年に言い返した。そこで、上座に座っていた男が立ち上がり、宣誓した。

「ここからが始まりだ。我らは一騎当千の力を以て赤のサーヴァントを殲滅する。誇り高き英雄達よ、汝らの奮戦を期待する。我が名はヴラド・ツェペシユ。護国の為、己が願いの為、勝利者となる事をここに誓おう。」

(おそらく) ランサーが宣誓し、ライダーや、アーチャー、バーサーカーらが膝を付き始めたので、俺も一応付けておく。

そこから、各自コンビでの交流を図ることとなり、解散。ゴルドは直ぐに謁見の間から出ていこうとしたため、俺は霊体化して、ゴルドについて行くことにした。

ゴルドの部屋に着いたら、ゴルドはワインを取り出してグラスに入れて一口飲んだ。「出てこい、セイバー。」

指示通り俺は霊体化を解いてゴルドの前に出る。

「これからお前は戦いの事に専念し、余計なことは考えるな。」

「分かったよ、マスター。」

マスターは何を考えている？ まあ大方一人の存在として扱う気がないんだろうね。

「お前はサーヴァント……使い魔だ。それを忘れず行使を全うせよ。」

「うん、マスターがそう言うならね。」

使い魔……はは、神が使い魔か。俺の正体に未だ気付いてないからクイズでも出そうかな。

「そ、それならお前の願望を聞かせるがいい。」

「願望?」

「そうだ。お前は聖杯に願いたい願望を求めるからこそ召喚されたのだろうか?」

願望ねえ、正直、退屈を凌ぎたいし、この聖杯大戦が終わったら戻ると言うくらいなら受肉した方が退屈を凌げるかも。うん、受肉にしよう。

「ううむ、強いていえば………受肉したいかな?」

「それだけか?」

「うん、大きすぎる野望も我が身を滅ぼす。なれば小さき野望をコツコツとこなす。それは何れ大きい野望へと至る。」

ダーニツクだかガーリックだか知らないけど、大望を持ち過ぎて人道からも非道からも外れるのは間違いないね。君はそうならないですよ? マスター。

「う、そうか。ならばお前の真名はなんなの? 先程から見ようとしても見れぬ。貴様はジークフリートなのか?」

「いいや、ジークフリートじゃあない。それに、俺はある種のメイカーだからね。マスターにヒントとスペックは与えておく。まずはスペックなんだが、筋力はB、敏捷はA、耐久はB、魔力はA、幸運はB、宝具はEXだ。クラススキルの対魔力はEX、騎乗はB、固有スキルの魔力放出はEX、戦闘統行はA、再生はEXだね。そして、ヒントは

四芳星、正義、神格、知名度は低いので4つだ。このうち最初の3つは全て俺に携わるものだ。マスターの聡明な頭脳で見つけてみな。」

さあマスター、君は俺が何者か、言い当てて見な。期日は問わないからね。

「ぬ、セイバー！ 貴様は使い魔だ、使い主の言うことは聞かぬか！」

え……………はあ、マスターはホムンクルスという生命を生み出す程の知識を携えてるから聡明な人だと思つてたのに、結局権威をかざして権威を利用するか。

「使い魔云々の前に、俺は一人の存在なんだ。意思もある。君は神にでもなつたつもりかい？ 神なら俺の真名を言い当ててよ。それと、令呪は効かないからね？ さつき言つたように対魔力はEXなんだから。」

「グツ……………もういい！ 下がっておけ！」

あははっ、正論かどうかはさておき、これだけ言われて言い返せないとは、それまでか。エルやギルなら直ぐに答えてくれたのにな。

「分かった。あ、俺の宝具つて発動に手間かかるから準備くらいはさせてね。」

「っ、貴様それはどういう……………ちっ、セイバーの奴、何を考えてやがる。」

マスターが何か言っていたが、俺は霊体化してマスターの部屋を出て、ユグドミレニアの城の1番上に立つ。

霊体化を解いて、終末剣エンキを2本とも取り出して、柄頭同士を接合し、少し角度を曲げる。

すると、終末剣エンキは二本一对の双剣から1つの弓と化した。

その弓で、矢を3本程宇宙そらに放つ。後は日が経つのを待つだけだ。

俺の宝具はかなり多く、魔力の消費も大きい。

さて、準備は出来たし、自室にでも行ってみようかな。

???

あれから時間も経ち、夜となった。

夜になったら謁見の間に招集がかかったので渋々行く事に。

来てから見せられたのは、ユグドミレニアのホムンクルスとキャスター作ゴーレム対赤のセイバーとそのマスターによる戦いだ。

ううむ、あのセイバーはチグハグだね。本心とすることが異なるし、それ自体に気づいてない。

このままだと、彼女は迷い続けるだけだろうね。

「ふん、強いな。」

「最優であるセイバーであることを差し引いても図抜けていますね。」

ランサーはこのセイバーを賞賛し、ダーニツクは戦力を分析している。そして、ラン

サーから問われた。

「勝てるか？」

単純な質問だろう。だが、俺は敢えて傲慢に語ろうか。

「無論さ。人は人故に悩み、悔み、克服し、前に進む。しかし、人と言えど立ち止まることはある。あのセイバーは立ち止まったまま死したのか、チグハグなどころがある。それを正さない限り、あのセイバーはあのままだろうね。あれなら何十人が束になろうと余裕さ。」

「ふん」

ランサーはこの答えに満足したのか、再び監視映像を眺めた。

俺も再びそちらに目を向けようとしたが、マスターからの念話で断念した。

【おいセイバー、ルーラーが此方に向かっているのをホームクルスが捉えた。赤より先にお迎えに上がる。来い！】

俺は仕方ないかなあ、と思いつつも霊体化して謁見の間を後にしたマスターに続く。いいいよ、敵と相見えることとなるか、楽しみだ。

2日目 前哨戦、後続の子は高潔

「ねえマスター、ルーラーを黒陣営に引き込むって言ったけど、裁定者だから無理だと思
うよ。」

「うるさい!! 貴様は黙って俺の言うことを聞いていればいいだけだー!」

まったく、このマスターは功績欲しさに出しゃばるんだから。

俺は忠告したのに聞かなかつたのかな?

大望を求め過ぎたら破滅に至る。故に小望を求め、コツコツとこなす。それは何れ大
望に至る。的なる事をさ。

まあ、指示通りに動きますか。

ホームクルスが運転する車内で、マスターはルーラーとの対面にソワソワしてる。俺
は車内でマスターを尻目に太陽由来の剣を準備している。終末剣エンキは最後辺りに
使うのが美味しいからね。

俺が用意した剣は彼の円卓の騎士に名を連ねる太陽の騎士ガウエインの持つ聖剣、
エクスカリバー・ガラディーン
転輪する勝利の剣だ。

別に破滅^ッの黎明^ムでも構わないのだが、あのセイバーと何れ戦うならこちらの方がいいだろうと、焰造^ムしたのだ。

向かう途中、突如として魔力の爆発があった。それはこの先だ。マスターはここで降りて、向かう。俺もついて行く。

視界に捉えたのは、旗を槍のように構えるルーラーと、宝具を発動しようと魔力を高める赤のランサーがいた。

それを見たマスターが指示を出てきた。

「殺れ！セイバー!!」

俺は霊体化を解いて、ランサーに突る。ランサーは槍の柄でこの一撃を逸らし、俺はルーラー側に立って、ガラディーンを横薙ぎ一閃。

その一撃でランサーの魔力の昂りを掻き消し、後ろにある道路標記の柱を切る。

そこでやっと、ルーラーと赤のランサーの全貌を知れた。

ルーラーは金髪の長髪を三つ編みにした蒼眼の少女で、赤のランサーは白髪に赤と青のオッドアイを持った青年だ。

「お前は黒のセイバーか。ふん、となれば、お前達の目標もルーラーか。」

赤のランサーが確認を取ってくるが、俺は無言の肯定をするだけ。その間に追いついたマスターがルーラーに近づく。

「危ないところでしたな、ルーラーよ。お迎えに上がりましたぞ。」

「黒のセイバーとそのマスターですね？」

「いかにも、我が名はゴルド・ムジーク・ユグドミレニアと申します。……さて、赤のランサーよ。お前がルーラーを殺害しようとしたのを我々は確かに見た。聖杯戦争を司る英霊を抹殺しようなどと究極のルール違反であろう！」

「いや、違反じゃない。ただ、規律が悪化するだけでそれ以外はない。まあ、規律が悪化するのが嫌だから助けたんだろうが。」

「否定はせん。無論、黒の陣営が現れた以上、まずは貴様らからだがな。」

ランサーが目線を一度マスターに向けた後、此方に直す。

「黙れ！大人しく我がセイバーとこのルーラーである彼女の沙汰を受けるがいい！」

「いいえ。」

マスターが俺とルーラーに討たせようとするが、ルーラーは拒否。マスターがほうけた声を出した。本当にこのマスターで大丈夫なのか？

「貴方方がここで戦うというのであれば異論はありません。私が手を出すことはありませんので、ご安心を。」

「何っ!?!」

「私が赤のランサーに狙われる事と赤のランサーと黒のセイバーが戦うことはまったく

別の案件です。私はルーラーとしてこの戦いを見守る義務があります。」

マスターは2対1で有利にたとうとしたのだろうが、ルーラーに拒否され、正論を言われて固まった。さらに、赤のランサーが槍を構えながら言う。

「俺を二人がかりで押し切ろうとでも企んだか？俺は構わんぞ？」

「グツウウウ、セイバー、殺せ！あの赤のランサーを叩き潰せ!!!」

マスターに怒鳴られたので俺は渋々構える。それに応じて赤のランサーも構えた。

「ならばお前と2人で殺し会えるようだ。貴様からは何処か懐かしい気配がする。……

この気配は太陽神に連なる者だろう。ならばこの戦いは偶然ではなく必然であったな。

我が名はカルナ。太陽神の子。我が槍を恐れぬと言うならば存分にかかってこい。」

赤のランサー・カルナが名乗りを上げた。名乗られたなら名乗り返す。それが当たり

前なのだろうが、俺は生憎とまだ名乗れない。だからヒントは与えておく。

「訳あって今は名を明かせない。故にヒントは与えておく。これを元に俺の名を当ててみる。1つ、四芳星。2つ、正義。3つ、神格。4つ、知名度は低い。以上のうち最初の3つは俺に携わるものだ。この聖杯大戦の間に答えに辿り着け。」

これだけのヒントでどれだけ正解に至るか楽しみだ。

「いいだろう。行くぞ！」

「はあっ!!」

俺とカルナは同時に飛び出し、衝突する。大きな爆発が包み込んだ。

鏢迫り合いから、右手首を捻って槍を軌道から逸らして剣を一回転させて首を狙う。だが、それを石突で弾き、俺の空いた腹に下から上にかけて袈裟懸けで切りつけてきた。

それをステップで2歩下がりがり左踵から魔力放出をして前に出て剣を振り下ろす。

振り下ろされたそれを、カルナは咄嗟の判断で回し蹴りをして俺を蹴り飛ばし、猛スピードで迫る。

それに対し俺は突り、お互いの獲物同士が擦れて、首かわ一枚の所を通り、当たらず。尽かさず、剣の柄頭で顔面を狙うが、首を傾げることで躲し、俺の右脇を通って俺の背後をとる。

そこを俺は剣を逆手に持って後ろに一突きし、心臓を狙う一突きを逸らし直接首と身体を分とうと両断を図る。

しかし、カルナは槍を巧みに使い、阻止、それから無限の撃ち合いに入った。

互いが互いに打ち消し合い、逸らし合い、なかなか決め手が決まらない。

カルナの攻撃が通っても、直ぐに再生し、逆に俺の攻撃は何かしらの道具の影響か、傷一つ作れない。

そして、1度距離を取った。

「成程な。親から得た鎧は不死。その鎧がある限り君は不滅なんだね。」

「貴様こそ、魔力尽きぬ限り無限に再生するのであろう。」

お互いに賞賛し合う。その間、見続けていたルーラーとマスターはこんな会話をしていた。

「何卒助力を。あのカルナは貴方の敵でもありませんか？」

「先も言いましたように彼らの戦いに色を加えることは出来ません。」

「グッ………出てこい！赤のマスターよ！魔術教会の犬め、この私自ら相手してやる！見ているのだろう！」

いくら叫べども、この場にはいない故に応答は来ない。それも分からぬマスターは聡明な人ではない確かな証拠だ。いつその事マスターを傀儡にして好きに動こうかしら？

「クソつ、クソオツ！私はマスターなんだぞ！」

マスターが俯いて何か言ってる。

戻るが、俺は剣道の切り返しのような動きで急所を狙い、カルナは槍の穂先と石突で的確に捌く。蹴りなどの闘術も混ぜた一身攻防の闘ぎ合い。

聽て、日は明けてしまい、中斷せざるを得なくなつた。

今までの闘ぎ合いで分かつたことだが、終末劍エンキを使用していたら、今頃カルナ

は宝具を使用してきていただろう。

そう思いつつも、鉾をしまう。

「このままでは日が登るまで撃ち合うことになるだろう。俺は別に構わんが、そちらのマスターはうんざりしているようだ。」

マアスウタアアアアア!!! うんざりしてないで感銘してよ! 聖杯戦争の醍醐味である殺り合いを直に見せてるんだからさあ!

マスターがカルナの物言いにたじろいだ。

「まあ、仕方ないか。それじゃあ、俺の真名をじっくり考えてくるといい。次に相見えたら、心ゆくまで殺り合いたいものだ。」

「ああ、黒のセイバーよ。初戦から貴殿と戦えたことを心から感謝しよう。」

赤のランサー・カルナはそう言い残して霊体化した。それをルーラーが止めるも、間に合わず、既に去った後だった。

「お二人共、見事な戦いでした。」

ルーラーの賞賛に1つ頷いて直ぐに霊体化した。後はマスターがルーラーに交渉して成功するか失敗するかのどちらかだろう。まあ、失敗するのは確定だろうが。

俺は一足先にユグドミレニア城に戻り、自室で寝た。

この時、黒のライダーが拾い物をアーチャーの部屋に連れて行っていたが、俺はその

事を知ることにはしなかつた。

3日目 に 神格解放。幼子（ホムンクルス）の未来の為

赤のランサー・カルナと殺り合ってから約12時間が経った頃に目が覚めた。

目覚めと同時にマスターから謁見の間に来るよう招集がかかったらしく、俺は身形を整えてから向かった。

着いた頃にはほぼ出揃っており、俺が着いたと同時にホログラムにある映像が映された。

「諸君、このサーヴァントは昼夜を問わず真つ直ぐこのミレニア城に向かっている。私はこちらが赤のバーサーカーだと睨んでいる。」

「どうしますか、叔父様?」

「無論この気を逃す手はない。このバーサーカー、上手くすれば我らの手駒に出来るやもしれん。」

黒のランサーのマスターから事情と正体の推測を言われ、黒のアーチャーのマスターがどうするのか尋ねた。それをランサーのマスターは好機と見て、利用するそうだ。

「ダーニック、戦術を聞かせてもらおうか。栄光ある戦いの幕を開こう。」

「はい、我が王よ。」

そこからダーニツクの戦術を教えられ、黒のアーチャーが少し手を加えたりして決まり、馳せて、夜へととなった。

夜になり、赤のバーサーカーを黒のキャスター作ゴーレムが足止めしている。

俺は既に森に入って待機しており、近くには黒のバーサーカーもいる。

黒のライダーが到着して、赤のバーサーカーと戦闘を開始。赤のバーサーカーは臂力が強く、剣の一振で巨木を切断し、黒のライダーはギリギリで躲していた。

黒のライダーが名乗りあげようと赤のバーサーカーが切り倒した木の切り株に乗り上げたが、妨害された。

そして、早速黒のライダーが宝具を使い、赤のバーサーカーの右脚を黒のライダーが突いた。

赤のバーサーカーが振り返り、黒のライダーに攻め込むも、右脚が消えていたため、転じた。

槍の力を誇示しても、赤のバーサーカーはライダー目掛けて飛び込んだ。が、黒のランサーの宝具により、腕を突かれて足止めを喰らう。ライダーはそれを見てからサラリと高台に移る。

「叛逆者赤のバーサーカーよ、汝が求めしものが権力者ならば余こそその頂きに立つ

者だ。」

「ハツハツハツハツ！貴様達が圧政者か？おお、圧政者よ！我勝利の凱旋謳わん！！」

黒のライダーが高台に移り、黒のランサーがダーニックと黒のキャスターを伴って赤のバーサーカーの前に立ち、立場を名乗る。それを聞いた赤のバーサーカーは攻め立てようとするも、黒のキャスターがゴーレムを精製して囲む。

そしたら、ゴーレムはそのまま粘土のようにうねり、赤のバーサーカーを飲み込まんと動く。

赤のバーサーカーは気にすることなく剣を黒のランサーに突き付ける。

「……カズィクル・ベイ極刑王」

しかし、黒のランサーの宝具が更に刺さったことで、黒のランサーには一歩たわなかつた。

「ソナタの叛逆は強者が弱者をいたぶるのを良しとせん。気高き魂の表れだ。初めて叛逆者に敬意を評したくなつたぞ？」

「圧政者よ、叩き潰す！！」

「叛逆者よ、変転せよ。………後は頼んだ。」

更に棘を刺し、赤のバーサーカーは剣を手放さざるを得なくなつた。それでも尚ランサーを狙う赤のバーサーカー。

黒のランサーがトドメの一撃を与え、後を任せた。

それを見届けたら、黒のライダーは一言告げて立ち去ろうとした。しかし、黒のライダーのマスターが止める。

黒のランサーのマスターが赤のバーサーカーの契約者とのパスを切り離して此方側に仕込もうと、キャスターに協力を仰いだ。

黒のキャスターは了承し、己のマスターと黒のライダーのマスターに手伝うよう促す。

そして、黒のアーチャーは構え、俺と黒のバーサーカーは霊体化を解いてスタンバイをする。

「では、残る2騎の迎撃はお前達に任せる。」

黒のランサーのマスターはそう言い残して、キャスターと共に作業を始め、黒のライダーは城に帰って行った。

ちなみに俺のマスターは城に籠っている。

俺と黒のバーサーカーは森の中を進むと、1人の緑髪的美丈夫が槍を肩に組んで、口笛を吹いていた。

俺たちに気付いたのか、此方に身体を向ける。

「よお、お二人さん。ああと、セイバーとバーサーカー辺りか？ いやあ、俺も甘く観られ

たものだねえ。 たった2騎で俺を仕留めようとか……………屈辱にも程があるぜ！」
緑髪的美丈夫はそう言い、蟻が放つ程の殺気を放ち、カラスが舞う。バーサーカーが唸る中、俺は前に出た。

それを気にせず槍を構え、宣言した。

「俺のクラスはライダーだが、安心しろ。戦車は使わねえ。 たった2騎相手じゃあ役不足だからなあ。 真の英雄……………真の戦士って奴をその身に刻んでやるよ。」

だから俺はこう返すことにした。

「バーサーカーはもう1騎の警戒を頼む……………ふむ、君は2騎で侮辱と言ったね？
……………俺からしてみたら、赤の陣営全員でかかってこない事の方が侮辱に当たるんだけど……………ねえ!!!」

返すと同時に飛び出して、戦闘を開始した。

転輪する勝利の剣で薙ぎ、突いて、逸らし、急所を狙い続ける。 それに対して赤のライダーは穂先で逸らし、石突で弾き、槍を掌で回転させることで上手く躲す。

1度距離を取ったところにマスターから何かしらの指示があったのか、そこを攻める黒のバーサーカー。しかし、躲されて蹴りを入れられて飛ばされた。

そこを尽かさず俺は攻め込むも、片手で抑えられた。俺は手合わせ気分で攻めているのだが、彼処は殺る気満々の様だ。

「残念だったなあ。お前に俺と戦う資格は無い!」

槍の穂先を俺に突き立てて来た。しかし、それを俺は転輪する勝利の剣の柄頭で抑え、弾いた。恰も不死性を持っていると見せつけるように。そうなる、相手は勘違いをするのが道理。

赤のライダーは距離を取り、声をかけてきた。

「そつちも耐久力が自慢か?こりや長くなりそうだなあ。」

「君がそう思うのなら、それでいいさ。……けど、代償で失わない限り不死であり続けるそつちのランサーとは違って君は単純だね。君の戦い方は顕著で分かりやすい。左踵を傷つけられないように立ち回ってるのがよく分かったよ。」

「ああ?何が言いてえ?」

「……俺は出し惜しみするタイプだからね。君が何処まで引き出してくれるかな?つて独りごちただけさ。」

「そうか。」

その一言と同時にひとつの矢が俺を穿ちに来た。俺は半歩下がる事で躲した。それを見た赤のアーチャーは驚いているようで、赤のライダーは目を見張っていた。

「おお、姐さんの渾身の一撃を躲すとはなあ。」

近づいてくる赤のライダーに黒のバーサーカーが唸り警戒をし、赤のライダーは俺か

ら黒のバーサーカーに目配せをして、

「こつちもバーサーカーを失ったんだ。互いに1つ失うならフェアだ。そうだろ？」

俺に向けて槍を構えた。相手にされなかった黒のバーサーカーは魔力を高めて、雷を撒き散らし出した。

それと同時に念話が届いた。

「ええい、何をしている！宝具だ。宝具を使え!!使わなければ勝てない！何を考えている!!今が宝具を使うべき機会だろう！どれだけ頑丈だろうとお前の宝具ならば打ち砕ける筈だ！」

いきなり、宝具を使うよう命令してきた。

「あのねえマスター、俺の宝具は抑えても対陸宝具。全力だと対界宝具なんだよ？分かる？マスターはヨーロッパ州を消し炭にしたいのかい!?それに此奴は頑丈なんじやない。不死性を有してるから傷つかないんだよ？」

俺の宝具は終末剣エンキによるもの。あれが使われたら最後、文字通り地球は洗い流される。即ち、人理が崩壊しかねないのだ。用意はすれど、使う気が無かったたそれを使用するよう宣告してきたマスターには呆れ果てた。

「ツハー……………戦いを楽しんでいるのだな?……………貴様は戦い続けることだけが喜びなのか!!!!!!……………令呪を以て命ずる！セイバー、宝具を以てして赤のライダーを倒す

はワイングラスを投げつけてきた。

投げられたワイングラスは壁にぶつかって割れた。

「お前のせいだ！この無能サーヴァントめ！！ダーニツクの奴め……あんな目を……私……どうすれば……どうすればいいんだ！」

「俺は——」

「ユグドミレニアの全マスターに告げる。ライダーがホムンクルスを一体引き連れて逃げた。そのホムンクルスは貴重な素体だ。必ず生きて取り戻せ。」

俺は以前告げたことをもう一度告げようとしたのだが、ダーニツクの妨害を受けた。しかし、面白いことを言われた。黒のライダーが貴重なホムンクルスを1人連れて逃げたと言ったのだ。

そのホムンクルスが兵隊のあれらなのか、魔力供給源なのか。魔力供給源ならば、抑止力が渡してきたジークフリートの心臓が役に立つ。

否、このためにジークフリートの心臓を用意したのか？

それはともかくマスターの独り言が何言ってるか分からない。1度落ち着いたら如何なものか。

「セイバー!!追いかけるぞ!!!これしかもう後がないのだ!!!」

……ほんと、このマスターはダメだな。ホムンクルスを生み出せてもマス

ターの才能は皆無だな。

俺はそう思いつつもマスターの後を追うことにした。

しばらく走り続け、キャスター作ゴーレムを倒し切った黒のライダーが背伸びをしていた。

「うーん、さてと！少し休んでから——」

「見つけたぞ!!」

「っ!!セイバー!?!」

黒のライダーが俺の存在に気づくと同時にマスターが声をかけた。俺はマスターの指示通りにライダーを抑えることに専念しようか。

マスターに大きな隙が出来るのをしばらく待つか。

「ええい、クソっ!こんな雑事に俺を使いおつて!」

功績に焦り飛び出したのはどこの誰だったか……………

ライダーは俺を警戒しているようだ。まあ、それもそうだ。サーヴァントだからこそ警戒するものだ。

「……………君、逃げろ……………」

「セイバー、ライダーを抑えろ!」

「何してるのさ!早く!!」

俺は転輸する勝利の剣を構えてライダーに飛び掛った。それを見たホムンクルスが喚く。

「いいから行け！生きたいなら迷うな！行け！！行け！！行けエ！！」

ホムンクルスは逡巡した後、逃げ出した。それを見ていたマスターは舌打ちしながら後を追って行った。

それを脇目に俺はライダーを弾き飛ばして背を打たせる。そして、喉元に剣を突き付けた。抑えるならこれでいいだろう。

しかし、黒のライダーは喚く喚く。転かした今も喚いている。

「退けよ！この大馬鹿野郎！唐変木！僕はあるの子を助けるんだ！」

助けようと宣言するこのライダーに現実を突きつけようか。

「何故助ける必要がある？抑止力に使われて残酷な終わり方をするくらいならキャスターの宝具の炉心として使われた方が楽に済むのに？」

「うぐつ………違う！僕が僕自身の意思で助けただけだ！サーヴァントが誰かを助けたらダメなのか！生きていた頃確かにあった慈愛を、誇りを、正義を忘れるのか！僕はシャルルマーニュが十二勇士アストルフオだ！僕はあの子を見捨てない！見捨てないと誓ったんだ！！」

黒のライダー、シャルルマーニュが十二勇士アストルフオが名を賭けて見捨てないと

誓った。何より、生前の善なる慈愛と英雄としての誇り、誤ちの無い正義を語られたとあらば引かざるを得ない。

「はあ、行けば？ 英雄としての誇りはともかく、慈愛と正義を言われたら俺は君と敵対は出来ない。早く行くといい。」

アストルフオは槍を霊体化して直ぐに駆け出した。俺は焔造した転輪する勝利の剣を解いて後を追う。

マスターの姿を捉え、次いで木元に血を吐いて倒れるホムンクルスの姿があった。

「君！ 大丈夫かい!? 返事をしろ!？」

俺はアストルフオがホムンクルスの心配をするその姿を尻目にマスターに声をかけた。

マスターは狼狽しながら口答えをしてくる。

「こ、殺されていた！もし、腕を変換していなかったら……だ、だから仕方ない……私は悪くない！」

そして、俺はアストルフオの方を見る。アストルフオは懺悔？ をしているようだ。だから俺はマスターに頼んだ。

「マスター、あのホムンクルスに治癒を施してくれないかい？ 俺はその子を救うことにした。」

「な、何をふざけたことを……………約立たずの使い魔如きが私に意見をするな!!お前はただ言うことに従ってればいい——」

「救う気がマスターにはないんだね?」

俺はマスターを見下す様に迫る。しかし、マスターは物怖じするだけで言うことは変わらない。だから俺は、マスターの腹を殴り気絶させた。

「え……………何を……………」

アストルフオはこの行動に驚愕した様子だ。

俺は再びアストルフオとホムンクルスの方に向き直った。そこに、闖入者が現れた。

「黒のセイバー」

「ん? ああ、ルーラーかい。」

「ルーラー?」

俺は2度目だが、アストルフオは初見なため、いまいち分からないようだ。

「俺はさ、傍観者でしか居れない。傍観者は基本出しゃばることは無い。手助けはすれど救う事は無かったし、ただの象徴だったさ。」

「一体何を……………」

「ライダーに言ったように彼は巻き込まれる運命に入る。けれど、1度は救ってみるのもありだよな。だから、俺はこれを捧げるよ。」

俺は懐に仕舞っていた彼の竜殺しジークフリートの心臓を取り出した。ルーラーはこれが何か分かったようだだが、何をするかまでは分からないようだ。

俺はこの心臓を焰で包む。しかし、その焰は優しく暖かな、何より、いつも見ている気がする焰だ。

「再び灯り、新たな生を芽吹け。」

枯れ果てていたジークフリートの心臓は心臓を包む焰を吸い取り、生氣を取り戻し、胎動する。

「……そんな……それは……」

ルーラーはこの一連の流れに何か気付いたのか、啞然としている。それを尻目にジークフリートの心臓をホムンクルスに植え付けた。

「でも、これは何処で手に入れたの!？」

アストルフオはこの心臓の出処が気になるのだろう。俺は苦笑いしながら答えた。

「それは答えれん。だが、この心臓のおかげで俺はここに居るようなものさ。このマスターは最初、ホムンクルスに授けた心臓の持ち主、ジークフリートを召喚する積もりだった。だが、ジークフリートの心臓を持っていた俺が召喚された。何故かは知らんがな。」

「……………ルーラーに聞きたいんだけどさ、令呪の剥奪はこの聖杯戦争のルール違

「反に嵌るかい？」

「それは……………」

「嵌るか嵌らないでいいさ。正直このちよび髭デブに俺の心臓を握られるのは侮辱だ。だから俺はこの男から令呪を剥奪する。此奴はマスターに向いてないからね。」

「……………例外によりますが基本嵌りません。」

「そうかい。なら、黒の陣営の存続のために令呪を剥奪するというのは特例でいいかい？否、それで押し通す。その子の為にもね？」

「あ、でもさ、俺にはアイツらにこの子を触れさせないことしか出来ないからさ、自由になったこの子を守ってやってくれないかい？」

「……………分かりました。」

俺はマスター、ゴールド・ムジーク・ユグドミレニアから最後の令呪を剥奪し、自由となった。これなら、縛られることなくアイツらに牽制出来る。逆に言えばそれだけしか出来ない。故にルーラーを頼った。

その途端、ホムンクルスが呻き出した。

「ちよ、どうしたのさ！君!？」

ホムンクルスの肉体が輝き、光が収まると、ホムンクルスの身形が変わっていた。服のサイズが変わっているのはご愛嬌だろう。

「……………どうなってるの、これ？」

「そう慌てるなアストルフオ。心臓とその子が適合して、最適な肉体に形作られるのだから。」

しばらくしたら、ホムンクルスが目を覚ました。アストルフオはその事に感銘しているようだ。

「生きてる！心臓動いてる！良かったあ！やったやったあ！！」

そんなアストルフオを尻目にホムンクルスはルーラーに目をやって、尋ねた。

「俺は……………一体…………」

「ご無事ですか？」

ルーラーはそのホムンクルスに手を差し伸べ、ホムンクルスは見蕩れ、そして手をとる。

「俺は……………どうして……………」

ルーラーが説明しようとしたが、俺が口を挟みでする。

「うん、問題は無いようだね。改めて、俺はセイバー。この馬鹿のサーヴァントをしていた奴さ。そして、君が生きている訳は偶然と偶然、そして偶然が重なったからさ。俺という存在が居合わせ、枯れた心臓を持っていた。俺にはその心臓を再活性させる力があつた。使わない手はないだろう？君にはまともな心臓が宿り、ホムンクルスから人間

になった。それだけさ。」

「……………初めまして、クラス・ルーラー。我が真名はジャンヌ・ダルク。約定に基づき、貴方の生命、貴方の魂をお守り致します。」

ルーラーは俺の頼みを了承してくれる様だ。良かったあ。

と、思えばアストルフオがホムンクルスに抱きついた。そこをルーラーが避けるように言う。

「良かったあ！生きてるよお！」

「彼の容態を知りたいのでちよつと避けてください。」

「生きてる、良かったあ。」

「……………失礼。」

言っても聞かなかつたために、ルーラーは強硬手段を取り、引き剥がす。アストルフオはゴルドのケツ前で止まった。状態で言えばお尻合いである。

「ジークフリートの心臓は正常に機能している。過去の聖杯戦争にもこのような事案は無かつたはず。」

「ジークフリート？ニールンゲンの歌の英雄…………彼の心臓…………」

ホムンクルスは心臓の鼓動を確認し、その間にアストルフオが近寄る。

「いいのいいの！君は助かった。それが重要なんだ！だろ？」

そして、事実確認をルーラーにとる。

ルーラーは何かしらの懸念事項がある様で暗い。その時に気配がした。

ふむ、黒の陣営が勢揃いしているな。

「つ……………セイバー、ライダー」

「あああ、来ちゃったか。」

「以外に早い者だね。みんな。」

「ライダー、何があつた？そしてそのサーヴァントは何者だ？」

ダーニツクは開口一番に状況の確認をライダーに取つた。

ライダーは言い淀んだ。まあ、ハチャメチャすぎてまだまとめきれないのだろう。

サーヴァント達が俺達を囲む。

「私はルーラー。此度の聖杯大戦の裁定を行う者です。」

「セイバーとゴルドの契約が切れてるのは何故だ？」

「それは俺が。この男と俺の相性は最悪だ。俺は願望を聞かれた時にこう言った。大望を抱き、それを成そうとすれば破滅へ至る。小望をコツコツと成して行けばいざ大望に辿り着く。つてね。だがマスターは聞き入れてはいなかった。だから功績欲しさに焦り、結果、俺は見放した。此奴がホムンクルスという生命を生み出す聡明さを持つからいいかって、思ってたんだけど…………滑りまくりで落ちた。それだけさ。」

俺の言い分を黒のキャスターが無視して問う。

「ならば、何故ホムンクルスが謎の心臓を得て人間となっている？」

黒のランサーが元ホムンクルスの少年を睨み、アストルフォが庇うように前に出て、更に俺が前に出る。アストルフォのマスターはアストルフォの態度にイラついているっぽい。

「答えよ。この場所で何があったのかを。」

「うーん、実は……………」

そこから、アストルフォがある程度説明し、俺は補足をつけるくらいした。

「……………そのような匙でセイバーを失うとは。」

「……………参ったなあ」

黒のバーサーカーのマスターの懸念事項は恐らく、今まで言いなりになっていた俺が自由になり、黒の陣営から離脱されることだろう。

そこに、黒のキャスターがダーニツクに進言した。

「ダーニツク、このホムンクルスは炉心として有用だ。」

それを聞いたダーニツクはアストルフォに目をやり、一言。

「彼を引き渡せ。」

「断る。」

アストルフオは一刀両断し、アストルフオのマスターは令呪を翳す。

「くだらぬ事で令呪を使わせるな。」

そこで、ルーラーが口を挟んだ。

「彼をこの聖杯大戦に巻き込むことは許されません。」

「何？」

「この聖杯大戦にもルールがあります。彼は望んで参加した訳では無い。」

しかし、黒のキャスターは切り捨てる。

「だが無関係ではない。彼は此方側が用意した魔力供給源のひとつだ。」

それを更にルーラーが切り捨てた。

「だとしても、彼がサーヴァントになった訳ではありません。キャスター、貴方なら分かるでしょう？」

ルーラーの問いかけに賛同し、その上で己の欲を優先した。更にダーニツクが付け加えた。

「確かに彼はホムンクルスだ。そしてそれこそが僕にとっては重要なのだ。」

「もとより、それはこの大戦のために用意した我々の資産だ。人格も歴史も家族もない。それらは戦う為に創り出されたのだ。」

「それは違うよ、ランサーのマスター。」

俺はダーニツクの最後の台詞を否定した。

「彼に人格が無い？彼に人格があるからこそこうして動いてる。彼に歴史が無い？彼はたった2日3日だろうがそれでもあるじゃないか。彼に家族が無い？それならこれからつくればいい。彼はホムンクルスとしては3年が限界だったろうさ。でも、今は心臓を持ち、鼓動し、動いてる。彼には死する時までの永久とわがあるじゃないか。それを君達
が圧する必要がどこにあるんだい？」

「貴様の言い分には何処にも無いな。だが、そのホムンクルスが生きて何になるという？」

「知るわけないだろう？何処ぞの金ピカのような全能眼を持つ奴なんていない。アーチャーの千里眼でさえ、長くて数分がいい所だろう？未来は決して絶対は無い。その人の人の動きで変わってくる。未来が不定形だから平行世界なんてものがあるんだろう。平行世界の無い絶対な未来があるなら今頃何処ぞの金ピカが乖離してる。故に彼はこれからに可能性を秘めている。」

「ならばセイバー、惜しくはあるが此処で打ち果てるか？」

ルーラーが見守る中、ランサーが最終手段に乗り出した。ランサーのこの一言に俺たちを囲うサーヴァントが構える。

「そこまでして彼の生を否定する気かい？」

「僕は僕の願いが叶うのならばそうするよ。皆は僕の願うそれが有用だから加担してくれてる。僕のアダムが動けば君が居なくても勝てるだろうしね。」

黒のキャスターがそう豪語した。俺はそれが真意だと言うことを知り得て、そうすることを決めた。分かるとしてもそれはルーラーだけだろう。

「……………よくぞ吠えたキャスターよ。君達がこの子の生を否定するのなら、俺は黒のセイバーとしてでは無く——」

俺は焔造していた鎧を解き、素顔を曝け出す。俺の顔は中性的で凛々しいらしく、髪が砂金の長髪故に身長と華奢な体軀も合わさって少女と間違えられやすい。

そして、俺本来の鎧を纏う。背には太陽の煌炎コロナの円が出来、俺は少し飛ぶ。

周りの木々は熱により溶け始めた。

この威光を知るのはアーチャーだけだろう。実際神と会ったことがあるのはアーチャーだけだろうし。

「——一人の善神として貴様らに引導を渡してくれる。俺の力量は貴様を越えるぞ、ランサー？俺の知名度は貴様の倍以上あるからな。セイバーとしての俺ならそこまではない。だが、善神としてなら、俺は赤と黒のサーヴァント全てを相手取っても余裕だからな。」

俺のこの姿に皆が唾然としていた。まあ、セイバーとして動くために神性は最低にま

で落としていたが、解放したせいで神性がEXにまで上昇。

「……………ランサー、これは諦めた方が聡明ですよ。」

「……………何となく分かるが申してみよ、アーチャー。」

「……………今の彼は紛うことなき神霊そのもの。逆にセイバーだったからこそ抑えられていた。今の彼に挑むのは愚策です。」

「……………そうか。……………最後に問うが、ライダー。自らの行為が恥ずべき裏切りだと思っているか？」

俺の神としての宣誓にこの子を狙うことを諦めたようで、アストルフオに裏切りのつもりで動いたかそうでないかを問うランサー。それにアストルフオはこう答えた。

「思っていない。なぜなら僕は正しい行為をしたと信じているからだ。」

この物言いにアストルフオのマスターは驚愕し、ランサーの機嫌を伺う。

「ふ、とは言え、バツを与えぬ訳には行かぬな。キャスター。」

ランサーはライダーに罰を与えることは決定し、キャスターに手錠をする。ルーラーがそれに警戒し、アストルフオは潔く乗った。黒の陣営に行くように促した。

俺は焔造で鎧を造り纏う。そうすることで善神からセイバーにまで格落ちして、ライダーに続く。

「待て、まだ話は——」

「良い。ルーラー、神を信じる者同士、手を組めるのではないかね？」

ルーサーはルーラーを勧誘仕出した。まあ、結果は見えているが。

「いいえ、互いが聖杯を求め、己の名譽に基づいて戦う限り、私は全てを受け入れます。」
ルーラーは断り、ルーサーは馬を引いて立ち去る。それに続くように黒の陣営も続く。アストルフオは一度立ちどまり、元ホムンクルスの少年に声をかけた。

「じゃあ君、僕が出来るのはここまで。さよならだ。大丈夫！今の君にならんなんだって出来る。街に行つて人と会つて、誰かを好きになつたり、嫌いになつたりして愉快に人生を過ぐすんだ。いいね！それでこそ、僕もセイバーも戦つた意味がある。」

「俺は……………」

「生きろ！君にはその資格がある。」

アストルフオはそれだけ言い、黒の陣営に着いていく。アストルフオのマスターは最後までホムンクルスの少年を睨み続けていたが。

「少年、君は何れ君自身の成し遂げたい思いが出来るはず。愚直なまでに悩み悔み、克服し前に進み続けるそしたら、辿り着けるはずだ。焦る必要は無い。あるのは諦めない気持ちと精一杯今を謳歌することだ。君が君であり続ける限り、俺は君を見守っている。そして、ルーラー。君は真名看破のスキルで俺の真名を知つたはず。だからこそ教えておく。この聖杯大戦は何が原因かは未だ不明だが、世界の抑止力が働き出している。推

測だがその子も抑止力により産まれた可能性がある。出来ればその子が出張る程ではなくなるように俺は努める。だから、その子を頼んだ。」

俺は顔を合わせずに（兜被ってるから俺の顔は見えない）これだけを言い残して、ゴルドを抱えて黒の陣営に着いて行っただ。

さて、あの子は何を思い何を成すか。俺は見届けてやりますか。

天舞う日輪の如く。